

逆接接続詞の繰り返し使用に 関するコーパス調査

渡辺裕美・関 玲・酒井晴香・陳 琦

◆要旨

本 研究では、日本語母語話者による逆接接続詞の繰り返し使用の実態について、小論文コーパスと学術論文コーパスを用いて検討した。分析の結果、逆接接続詞の中でも「しかし」は繰り返し使用が多く、書き手が許容している可能性があることが示唆された。それに対し、「しかしながら」「だが」「ところが」は同一接続詞の繰り返しが見られず、他の逆接接続詞が後続しにくいことが示された。なお、「しかし」については、小論文コーパスで繰り返し使用が確認された文を用いて、繰り返しを読み手にも許容されるかどうかを調査した。その結果、「しかし」の繰り返しはほとんど指摘されなかったことから、「しかし」の繰り返しは書き手だけでなく、読み手にとっても許容される可能性が高いことが示唆された。

◆キーワード

逆接接続詞、書き言葉、コーパス、繰り返し、許容度

◆ABSTRACT

This study aimed to investigate the repetitive use of six adversative conjunctions by native Japanese speakers in written texts. The materials used were a corpus of original essays and academic papers created by the authors of this study. Results indicated that the repetitive use of shikashi was most common among the six adversative conjunctions, which appeared to be highly acceptable for writers. In contrast, the repetitive use of shikashinagara, daga, or tokoroga was not observed, and there were very few cases where they co-occurred with and preceded other adversative conjunctions. We also conducted a survey to assess readers' tolerance of the repetitive use of shikashi within the corpus of essays, and very few participants considered it unacceptable.

◆KEY WORDS

adversative conjunctions, written texts, corpus, repetition, tolerance

A Corpus Study into the Repetitive Use of Adversative Conjunctions

HIORMI WATANABE, LING GUAN,
HARUKA SAKAI, QI CHEN

1 はじめに

私たちは文章を構成していく際、意識的にせよ無意識的にせよ同一表現の繰り返しを避け、類似表現に言い換えることがある。逆接続詞は文章を論理的に構成していく際に必須かつ頻出の表現の1つであるが、一口に逆接続詞といっても「しかし」「だが」など様々な表現があるため、母語話者は同一表現を繰り返さないよう言い換えをしていることが予測される。

日本語学習者の作文指導においても、同一表現の繰り返しをしないように指導が行われている。内藤(2016)では同一表現の重複について「誤用にはならないものの、冗長で稚拙な印象を読み手に与えるだけでなく、理解しにくくさせてしまうおそれもある」(p.65)として、重複回避は指導されるべきという前提において日本語作文教材を調査している。調査の結果、重複や省略の記述がある教材は、調査対象とした22冊中5冊^[註1]であった。また内藤(2016)では今後の課題として、日本語母語話者の「重複」の判定調査の必要性を述べている。

それでは、日本語母語話者は文章を書く際に頻出である逆接続詞を、実際の文章構成の中でどのように繰り返して用いているのか。本研究では、日本語母語話者の逆接続詞の繰り返し使用の実態を明らかにすることを目的とし、コーパス調査とその分析を行う。

2 先行研究

2.1 日本語教育における逆接続詞

日本語教育において、逆接続詞は小論文やレポートなどの書くスキルを身につけることを目的とした教材の多くで取り上げられている(稲垣1986, 木村・山田1998, 友松2008, 二通・佐藤2014, アカデミック・ジャパニーズ研究会2016など)。これらの教材では、逆接続詞の書き言葉と話し言葉の使い分けや、意味による形式の使い分けが主に紹介されている。例えば、二通・佐藤(2014)は、「でも、だけど」を「話し言葉の表現」としているのに対して、「しかし、だが」を「で

ある体」の表現としている。また、アカデミック・ジャパニーズ研究会(2016)では、「しかし、しかしながら」の意味を「前文の内容に反する事実や意見を示す」と説明している一方、「ところが」の意味を「予想に反する展開を示す」と説明している。さらに、「しかし」と「しかしながら」の使い分けについて、「しかしながら」は「しかし」よりもかたい表現で、特に強調したい部分で使われることがある」等と述べている。しかし、いずれの教材においても逆接続詞の繰り返し使用に関する記述は見られない。

2.2 逆接続詞

逆接続詞について、永野(1967)は「前のことがらとそぐわない事、つりあわない事、反対の事、などが次にくることを表すもの。または、前とあととを対立させる意味を表すものもある」(p.86)と定義している。同様に、市川(1978)、田中(1984)も、逆接続詞は前件のことがらが後件に反する場合に用いられると定義している。本研究では、永野(1967)、市川(1978)、田中(1984)が逆接続詞として共通して挙げている「しかし、だが、けれども、ところが」、さらに、接続表現のジャンル別出現頻度調査(石黒・阿保他2009)において「論文」で特に出現数が多い^[註2]「一方、しかしながら」を分析対象とする。

3 方法

日本語母語話者の逆接続詞の使用実態を調べるため、コーパス調査を行った。分析対象は、得られた知見を日本語教育に応用することを前提とし、書き言葉の中でも日本語学習者にとって書くスキルの習得が求められる小論文と学術論文にすることとした。小論文コーパスは「NRI学生小論文コンテスト」^[註3]の2006～2015年度の大学生(40本)および高校生(46本)による入賞小論文計86本を独自にテキスト化し作成したもので、総形態素数は186,731である。学術論文コーパスは人文系研究誌4誌^[註4]の「研究論文/研究ノート」計50本を独自にテキスト化したもので、総形態素数は343,510である。

分析では、まずコーパス別に各逆接続詞の出現数を算出した(分析1)。次に繰り返し使用の実態を把握するため、小論文コーパスは段落ごとに、学術論

文コーパスは小節^[注5]ごとに各逆接続詞の出現数を算出し、同一接続詞の出現数を分析した(分析2)。

4 結果と考察

4.1 分析1 逆接続詞の出現数

逆接続詞の出現数を表1に示す。分析の結果、小論文において出現数が最も多かったのは「しかし」で、次いで「一方」^[注6]、「だが」、「しかしながら」、「ところが」、「けれども」の順で出現していた。学术论文コーパスにおいても、「しかし」の出現数が最も多く、次いで「一方」、「しかしながら」、「ところが」、「だが」の順で出現していた。以上の結果から、逆接続詞の中では「しかし」の使用が最も多く、次に「一方」の使用が多いことがわかる。

表1 小論文と学术论文における逆接続詞の出現数

小論文コーパス				学术论文コーパス			
順位	接続詞	出現数	100万形態素あたりの出現数	順位	接続詞	出現数	100万形態素あたりの出現数
1	しかし	234	1253	1	しかし	232	675
2	一方(で)	37	198	2	一方(で)	119	346
3	だが	27	145	3	しかしながら	26	76
4	しかしながら	16	86	4	ところが	19	55
5	ところが	13	70	5	だが	6	17
6	けれども	1	5	6	けれども	0	0

4.2 分析2 逆接続詞の繰り返し出現数

逆接続詞の繰り返しについて、小論文コーパスにおける出現数を図1に、学术论文コーパスにおける出現数を図2に示す。図1は一段落内、図2は一小節内の繰り返し出現数を示している。図では1番目に出現する逆接続詞別に繰り返しの出現順を示し、それぞれの繰り返しパターンについて出現回数を示

した。図1の場合、一段落内に逆接続詞「しかし」が1回しか現れなかったものは出現回数が192、「しかし」が2回現れたものは出現回数が8、「しかし」の次に「だが」が現れたものは出現回数が6ということを示している。同様に図2の場合、一小節内に逆接続詞「しかし」が1回しか現れなかったものは出現回数が92、「しかし」が2回現れたものは出現回数が21、「しかし」の次に「一方」が現れたものは出現回数が3ということを示している。なお、分析1で最も出現数が多かった「しかし」をゴチック体で示した。

分析の結果、小論文(図1)では「しかし」の繰り返し出現数が最も多く、特に「しかし+しかし(一段落内に「しかし」が2回現れたもの)」が8回と多い。それに対し、「しかしながら」「だが」「ところが」は同一接続詞の繰り返しが見られないのに加え、同一段落内には他の逆接続詞が出現しにくいことがわかる。学术论文(図2)の場合も小論文同様、「しかし」の繰り返し出現数が最も多く、特に「しかし+しかし」が21回と多い。また、「しかしながら」「だが」「ところが」に繰り返しが見られず、同一小節内に他の逆接続詞が出現しにくいことも小論文と共通している。なお、逆接続詞の出現数全体を見れば、繰り返し使用は単独使用に比べて多くはない。それでも、繰り返し使用に焦点を当てれば「しかし」の繰り返しが多いのに対し、他の逆接続詞の繰り返し

1回	2回	3回	回数
しかし			192
しかし	しかし		8
しかし	だが		6
しかし	ところが		2
しかし	しかし	しかし	2
しかし	だが	しかし	1
一方			27
一方	一方		2
一方	しかし		3
一方	一方	しかし	1
しかしながら			13
しかしながら	しかし		1
だが			17
だが	しかし		3
ところが			11

図1 小論文における逆接続詞の出現順と繰り返し回数

1回	2回	3回	4回	5回	6回	回数
しかし						92
しかし	しかし					21
しかし	一方					3
しかし	ところが					3
しかし	しかしながら					1
しかし	だが					1
しかし	しかし	しかし				3
しかし	しかし	ところが				1
しかし	しかし	しかしながら				1
しかし	しかし	一方				1
しかし	一方	しかし				2
しかし	ところが	しかし				1
しかし	ところが	一方				1
しかし	一方	一方				1
しかし	しかし	しかし	しかし			1
しかし	しかし	ところが	しかし			1
しかし	しかし	一方	しかし			1
しかし	一方	しかし	しかし			1
しかし	ところが	しかし	しかし			1
しかし	しかし	しかし	しかし	しかし		2
しかし	しかし	しかし	一方	しかし		1
しかし	ところが	しかし	しかし	しかし		1
一方						39
一方	一方					12
一方	しかし					12
一方	しかしながら					6
一方	だが					1
一方	ところが					1
一方	一方	しかし				2
一方	一方	一方	一方	しかし		1
一方	一方	一方	しかし	一方		1
一方	一方	しかし	しかし	しかし	しかし	1
しかしながら						15
しかしながら	しかし					1
しかしながら	ところが					1
だが						2
だが	しかし					1
だが	一方	一方				1
ところが						2
ところが	しかし					2
ところが	一方					1
ところが	一方	一方				1
ところが	しかし	一方				1
ところが	しかしながら	しかし	しかし	しかし		1

図2 学術論文における逆接接続詞の出現順と繰り返し回数

特に、「しかし」の繰り返し出現数が多い点については、多くの先行研究（渡辺1995など）において触れられているように、日本語の「しかし」は、後件にそれまで述べられている事柄から一般的に推論される結果とは異なる出来事が来る場合であれば、それほど明らかな逆接関係がなくても用いられることに関係すると思われる。一般的に明らかな逆接関係、つまり肯定・否定の対立が連続的に現れると、論理的に矛盾しており、文がわかりにくくなる。しかし、「しかしながら」「だが」「ところが」などの逆接接続詞に比べれば、「しかし」は「対立的逆接」の性格が弱いので、連続で用いられても矛盾にはならない。

以上のように、「しかし」の繰り返しは、書き手が許容している可能性があることが示唆された。しかし、分析2の結果からは、「しかし」の繰り返しを読み手にとっても許容されるかどうかまでは明らかにできていない。そこで、分析2の結果を踏まえ、4.3において「しかし」の繰り返しに対する読み手の許容度を検討する。

4.3 「しかし」の繰り返しの許容度

4.3.1 繰り返し許容度調査の方法

分析2では、書き手は「しかし」の繰り返しを用いやすいという結果が示された。ここでは、その追加調査として読み手の「しかし」の繰り返しの許容度を明らかにする。

調査では9つのテスト文を用意した。この9つのテスト文は、小論文コーパスで「しかし」の繰り返し使用が確認されたものであり、「しかし+しかし」が7例^[註7]（文1～7）、「しかし+しかし+しかし」が2例（文8、9）である。文1～9の中で、「しかし+しかし」の文1～5をAとし、「しかし+しかし」の文6、7と「しかし+しかし+しかし」の文8、9をBとして、AとBそれぞれ8名、計16名の大学生（日本語母語話者）に質問紙調査を行った。

調査対象者には、「次の文章を読んで、不自然な箇所の下線を書いてください。なお、下線の下に不自然だと思った理由を書いてください。」という指示文とともに提示した。

4.3.2 繰り返し許容度調査の結果と考察

調査の結果を表2に示す。表2には文章中の「しかし」に下線を引かなかった人数（下線無し）と下線を引いた人数（下線あり）を示した。

表2からわかるように、「しかし」が不自然だと判断された文は4文ある。この4文のうち、繰り返しについて指摘されたのは2文であった（文1、文8）。

以下に「しかし」の繰り返し使用が指摘された文1と文8を示す^[註8]。コメントのあった「しかし」には下線を引き、コメントはカッコで示した。

表2 「しかし」に対する下線の有無

	文1	文2	文3	文4	文5	文6	文7	文8	文9
下線無し(人)	7	7	8	8	7	8	8	7	8
下線あり(人)	1*	1*	0	0	1	0	0	1	0

注 *は同一人物であることを示す。

文1（「しかし」2回）

私のおばあちゃんは毎朝近くの友人とウォーキングをするほど元気があります。以前私がおばあちゃんに「また働いてみたい？」と聞くと、笑って、「そりゃあ、できるなら」と話していました。しかしその後、「でもなかなかできないよねえ」と言い、「雇ってくれる職場があればねえ。どんどん働くんだけどねえ」と言いました。なぜ、働くお年寄りの数が少ないのか？ お店がお年寄りを雇わないこともあると思いますが、そもそもお年寄りがあまり面接を受けに行かないからです。そこでまた疑問がわきました。なぜ面接を受けに行かないのか、ということです。その理由は、ファーストフード店で働くのは若い子という先入観が社会一般にあるからだと思います。お年寄りの中には、自分が足を引っ張るかもしれないという不安を持っている人もいるかもしれません。しかし（「しかしが多い」）何より、その先入観が、お年寄りの社会復帰の妨げになっているのではないのでしょうか？

文8（「しかし」3回）

経済大国日本、表面上確かにそうだったのであろう。しかし「想定外の地震」によりその体制そのものの脆弱さが露呈し、震災後の復旧もままならない状況である。この状況を終戦後に似ているとして震災後と呼ぶ人がいる。しかし（「が」に変えたほうがよい）私は終戦後と同じだとは思えない。それは、終戦時は国土全体が焦土となり、全国民がその被害を受けている。しかし、今回の大震災は被害こそ甚大だが、東日本の沿岸部の被害が主であり、日本全国民から見ればその痛みは、限定的なものではないのかと思う。震災発生時の関東圏での食料の買い占めや、京都の大文字焼きでの陸前高田の薪不使用問題を見るにつけ、被災県以外では他人事ではないのかと思えてならない。

以上のように、文1と文8に対する指摘は「しかし」の繰り返しを許容しないことを示しているが、指摘したのは8名中1名と少ない。残りの回答者は「しかし」の繰り返しを特に指摘せず、調査後のフォローアップインタビューで2名から「言われてみれば確かに「しかし」が多いかも」というコメントがあったが、「しかし」の重複に関して否定的なコメントはなかった。以上より、読み手にとって「しかし」の繰り返しは許容される可能性が高いと言える。

5 まとめ

本研究では日本語母語話者の逆接続詞の繰り返し使用の実態について、小論文コーパスと学術論文コーパスを用いて検討した。逆接続詞の出現数（分析1）については、「しかし」が最も多く、次に「一方」が多いことが示された。逆接続詞の繰り返し出現数（分析2）については、小論文、学術論文ともに「しかし+しかし」の繰り返しが多いことが示され、書き手が「しかし」の繰り返しを許容している可能性があることが示唆された。それに対し、「しかしながら」「だが」「ところが」は同一接続詞の繰り返しが見られず、同一段落内または同一小節内に他の逆接続詞が出現しにくいことが示された。

なお、「しかし」の繰り返し使用については、「しかし」の繰り返しを読み手にとっても許容されるかどうかを許容度調査によって検討した。その結果、「しかし」の繰り返しはほとんど指摘されなかったことから、「しかし」の繰り返しは書き手だけでなく、読み手にとっても許容される可能性があることが示唆された。

本研究で得られた逆接続詞の繰り返し使用に関する知見は、日本語教育における書くスキルの指導に役立てられると言える。例えば、逆接続詞として「しかし」を使えば、繰り返し使用した場合でも読み手にマイナス評価を与えずに済む可能性が高いという点や、「しかしながら」「だが」「ところが」は同一段落内や同一小節内で同じものを繰り返し使用することを避けたほうがよいという点を指導時に示すことができる。

ただし、本研究の許容度調査で対象としたテスト文は小論文コーパスで確認

された9例に限られている。よって、今後はより多くの母語話者による逆接続詞の繰り返し使用例を収集し、「しかし」の繰り返しが許容される状況について、幅広く検討していく必要がある。また、本研究の許容度調査で用いた「しかし」の繰り返しは、「しかし」間に2～7文が含まれる文章であった。そのため、「しかし」間に2文以上含まれていれば、「しかし」が繰り返されても許容される可能性が高いと言えるが、「しかし」間に1文しかない文章の場合については許容されるかどうか確認できていない。したがって、今後は「しかし」間の文章が1文のみであった場合の許容度についても検討する必要がある。

〈渡辺：滋賀大学、関・酒井・陳：筑波大学大学院生〉

謝辞

本研究は授業で作成したコーパスデータをもとにまとめたものです。本稿の執筆にあたってご指導いただきました筑波大学澤田浩子先生、コーパス作成時や論文執筆時にご協力いただいた受講生のみなさまに深く感謝いたします。また、査読の先生には貴重なご助言を賜りました。厚く御礼を申し上げます。

注

- [注1] …… 内藤 (2016) では、重複・省略について記述がある教材として倉八 (2000)、佐藤他 (2002)、石黒・筒井 (2009)、門脇・西馬 (2014)、田中・阿部 (2014) を挙げている。上記5冊の教材では、主に主語や述語などの重複・省略について述べられており、逆接続詞についての記述は見られない。
- [注2] …… 石黒・阿保他 (2009) の調査では、「論文」において特に出現頻度が高い逆接続詞として、しかし (1位)、一方 (11位)、だが (12位)、しかしながら (16位) が挙げられている (() 内は出現頻度の順位を表す)。
- [注3] …… 野村総合研究所が日本国内の大学院、大学、短大、高等専門学校、高校、日本語学校に在籍している日本人学生および留学生を対象に毎年実施している小論文コンテストである。本研究では「NRI学生小論文コンテスト」のホームページで公開されている大学生と高校生の小論文 (入賞論文) 86本全てを分析対象とした。
- [注4] …… 4誌はオープンアクセスの人文系研究誌、『言語研究』146～148号10本、『国語科教育』第77～78集10本、『国際交流基金紀要』第3～12号10本、『小出記念日本語教育研究会論文集』No.7～9、No.21～22の20本である。
- [注5] …… 小論文コーパスと学術論文コーパスでは分析単位が異なっているが、本研究

では小論文の段落に相当するものが学術論文の小節に相当すると判断し分析を進めた。

- [注6] …… 「一方」の出現数には「一方で」の出現数も含む。
- [注7] …… 小論文コーパスにおいて一段落内で「しかし」が2回繰り返されるパターン (「しかし+しかし」) は8回出現していた (図1参照)。しかし、そのうち1つの「しかし+しかし」は1番目の「しかし」が段落冒頭出现过していたため、他の出現例と性質が異なると判断し、テスト文として用いなかった。
- [注8] …… 「しかし」を指摘したが理由が繰り返し以外だと判断された文 (文2、文5)、「しかし」に対する指摘が見られなかった文 (文6) を資料として添付する。

参考文献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会 (編) (2016) 『改訂版 大学・大学院 留学生の日本語④ 論文作成編』アルク
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥子・中村紗弥子・劉洋 (2009) 「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12, pp.73-85. 一橋大学留学生センター
- 石黒圭・筒井千絵 (2009) 『留学生のためのここが大切 文章表現のルール』スリーエーネットワーク
- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 稲垣滋子 (1986) 『日本語の書き方ハンドブック』くろしお出版
- 門脇薫・西馬薫 (2014) 『みんなの日本語初級 やさしい作文』スリーエーネットワーク
- 木村魁巴・山田信一 (1998) 『すぐに使える実践日本語シリーズ 語や文のつながり接続詞 (初・中・上級)』専門教育出版
- 倉八順子 (2000) 『日本語の作文技術 中・上級』古今書院
- 佐藤政光・戸村佳代・田中幸子・池上摩希子 (2002) 『表現テーマ別 にほんご作文の方法 (改訂版)』第三書房
- 田中章夫 (1984) 「4 接続詞の諸問題—その成立と機能」鈴木一彦・林巨樹 (編) 『研究資料日本文法第4巻 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』pp.81-123. 明治書院
- 田中真理・阿部新 (2014) 『Good Writingへのパスポート—読み手と構成を意識した日本語ライティング』くろしお出版
- 友松悦子 (2008) 『小論文への12のステップ』スリーエーネットワーク
- 内藤真理子 (2016) 「作文・レポート教材における重複と省略に関する記述の分析」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』8, pp.65-73. アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会
- 永野賢 (1967) 『学校文法文章論—読解・作文の指導の基本的な方法』朝倉書店
- 二通信子・佐藤不二子 (2014) 『留学生のための論理的な文章の書き方 改訂版』スリーエーネットワーク
- 渡辺学 (1995) 「ケレドモ類とシカシ類—逆接の接続助詞と接続詞」宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』pp.81-123. くろしお出版

資料1 文2（「しかし」2回／指摘したのは文1と同一人物）

現在、日本には「さくらネットワーク」というものがある。これは国際交流基金が海外日本語教育拠点の整備拡充を実現するため、世界各国の中核的な日本語教育機関を構成メンバーとしたものであり、2011年8月現在、43カ国116拠点で展開している。現在、日本の国際協力NGOは400以上あるといわれ、世界100カ国以上で活躍しているという。そのほとんどの組織で子供たちへの教育支援が行われている。このNGOやNPOを「さくらんぼネットワーク」で繋いでいくのだ。現地に学校を建て、給食を配り、学用品を与えるというサポートは必須である。しかし（ここで逆接は変に感じる）、13歳ぐらいになると学校を終え、そのまま社会に出るしかないという子供たちが圧倒的多数である。読み書きを教えることは、子供たちの生きる力の源である。しかし、そこで教育支援を終えてしまうのは、あまりにも惜しい。

資料2 文5（「しかし」2回）

日本では、いまだにベンチャー企業が育たないと言われている。そして、さまざまなアンケート結果がそれを支持している。しかし、私はそのアンケート結果が全てだと思わない。日本には、これまで世界初の製品やサービスを生み出してきた企業が数多く存在し、それらの多くが最初は小さなベンチャー企業だった。日本にはまだまだ表には出ていない秘められた可能性があると思う。その可能性を呼び起こすためには、何かを変える必要がある。しかし（「しかし」か？ 接続詞）、やみくもに何かを変えることは失敗を招くし、全てを変えることは現実的ではない。また、海外で成功している事例だからと言って、それをそのまま日本に移植しても機能するとは限らない。日本の商習慣・文化にフィットした、日本独自のモデルが必要なのではないだろうか。

資料3 文6（「しかし」2回）

第二に、東京証券取引所の改革を提言したい。東証は、時価総額でNY証券取引所に次ぐ世界第2位の証券取引所であり、本来は日本のグローバル化の窓口となるべきところである。しかし現在は、世界の金融市場での東証の存在感は、日本経済と同様に大きく低下している。東証は、1990年の時点では、世界の株式時価総額8.9兆ドルのうち2.9兆ドルを保有しており、世界の株式時価総額の3割を担っていた⁴⁾。しかし、1990年から2006年の間に、NYの時価総額は5.73倍、上海は55倍、香港は20倍にまで上昇したのに対し、東証は1.58倍と伸び悩んだ。このままでは、アジアトップの証券市場の座は、近年急速に規模を拡大している上海などに奪われかねない。政府は東証改革を日本のグローバル戦略の中核に位置づけ、東証と協力しながら、改革を進めていかなければならない。まずは、外国人が東証で取引する上で大きなネックとなっている、日本語での有価証券報告書の作成の義務などの時代遅れの制度を中心に改革すべきである。